柳田國男『石神問答』は境界を鎮守する神を課題としていたのか？

2023/9/9　日本宗教学会第82回学術大会@東京外国語大学

由谷 裕哉（金沢大学客員研究員・小松短期大学名誉教授）

1　柳田國男『石神問答』を境界を鎮守する神の考察，とみる旧来の評価

『石神問答』は，全34通プラス柳田による概要，表や注を付記した，柳田を中心とする往復書簡集（柳田発の書簡は全22通）。1910年（明治43）5月刊(『遠野物語』の1ヶ月前)。以下，下線は引用者（由谷）。

○ **柳田國男**の本書中での文言；「何でも蕃人の神にて　我々の祖先土着の砌彼等との地境に之を祭り相侵さゞるを計りしこと　恰も山の神塞の神荒神など〻同じきかと存じ候」(#1山中笑宛て書簡，『定本柳田國男集』第12巻，p.20)，「例の石神又岐神は昔より此國におはせし神にして　辺防を職掌とせられしやうなれども」(#34松岡輝夫宛書簡，同p.145.；←以下“定本12”と略記。定本は同書再版，新しい『柳田國男全集』1は初版を底本としており，表記が一部異なる；“#”は全34通の中でのノンブルで，要は最初と最後にこのような文言がある，ということ)

○ **折口信夫**「石に出で入るもの」（1932）；「此は，先生が境の神の研究といふ事に興味をもつて，お書きになつたのではないか，と思ひます。」(『折口信夫全集』第15巻民俗学編1，p.213)

○ **和歌森太郎**『日本民俗学概説』（1947）；「これは氏が山中笑ら同好の士との間に石神問答につき文通した書面をそのまま録したものである。柳田氏はサゴシ，シャクジ，シャグジなどの地名に対する疑問を提示したところ，山中これに答へて，駿河にオシャモジといふ神あり，石神であつたらしいところから，それらの地名も「石神」の存在したことに由来しようと述べた。氏はそれに賛成せず，漸次論証を勧めてけつきよく，シャクジは延喜式に見えるサクの神と関係あり，サクよりシャクジに転化したのであり，そのサカヒの神として道祖神なるがゆえに，石祠が祀られるやうになつたのだ，と説明したのであつた。」(東海書房〈初版〉，p.86)

○ **篠宮はる子**「「石神問答」における柳田国男の視点と方法」（1965）；『石神問答』について，おそらく初めての本格的な考察。 柳田発の書簡における対象(祭神，地名，塚)と側面(神体などその実態，語義)とでマトリックスを作り，これら6つの局面をそれぞれ検討している。例えば，祭神の実態としては多くが里から離れた山中や国郡の境にあること，地名の実態についても山中や村境が多くみられること，など。結論として，シャグジの因由が地境を侵されることを防ぐ為の鎮護の機能にある，とするが，論旨にかなり飛躍があるのでは；(『民俗』第62号)

○ **佐野賢治**「解説」（1990）；「『石神問答』で取り交わされる話題や神々は，日本の民間小祠すべてに及んでいるといっても過言ではない。」，「柳田は，このように多様な石神信仰において，石神を境を塞(ふせ)ぐという機能を中心に考えようとした。」(ちくま文庫版『柳田国男全集』15，pp.563f.)

○ **村井紀**『南島イデオロギーの発生』（1992）；第3章「「遠野物語」の発生」において，『石神問答』の緒方小太郎宛書簡(#33)で柳田が，植民地台湾の「山人」をモデルに「日韓の交通」を究明しようとしていた，と位置づけ(岩波現代文庫からの2004新版，p.130)。さらに，#33と松岡輝夫宛て#34を同書の「後書き」と解釈(同pp.159f.)。

○ **石井正己**『遠野物語の誕生』（2000）；『遠野物語』(1910.6) の頭注複数に『石神問答』の内容が入り込む場合を列挙(pp.164f.)。柳田の書簡#17で彼が「山人」の概念に向かっていたことを指摘し，『遠野物語』より『石神問答』を優先させたのは，「まず「山人」の前提になった「古い時代」の「荒ぶる神」を明らかにしようとしたからであったと思われる」(p.169)，とする；《←先行研究では珍しく，境界守護云々を前面に出していない。また，「刊行当初から『遠野物語』に比較して，その難解さゆえに『石神問答』はほとんど読まれなかった」〈p.170〉としている》

○ **大塚英志**『怪談前夜 柳田民俗学と自然主義』（2007）；おそらく村井紀『南島イデオロギーの発生』(1992)を念頭に，生蕃(台湾の山地民)との境界をなす隘勇線が柳田山人論の背景にあったとする。その根拠を，『石神問答』冒頭の「概要」箇所に出る「我が民族の國を建るや前には生蕃の抵抗あり後には疫癘の来侵あり四境の不安絶えず即ち特に地神の祭式に留意し境界鎮守の神を崇祀したる所以なり」(定本12，p.18)，に求める。ここから大塚は，「正体不明の「石神」こそが日本式の隘勇線である，と柳田は主張するのである」(p.149)，とする。

２　代案を求めて；書簡の宛先による特徴

『石神問答』で触れられる事例の中で，所在が境界地帯でない神社，祠や塚を探す方法が考えられる；eg.(比較的名の通った神社として) 相模国中郡国府村の**守公神社**(しゅこう)，同郡吾妻村の**守宮神社**(しゅぐう) (#9;前者は現・大磯町，後者は現・二宮町)，鹿児島領の**御霊神社** (#9;現・いちき串木野市)，彦山権現の摂社の一つ**大行事社**(#9，現・高木神社＠朝倉市)，甲斐国府の**守ノ宮明神** (#13，現・甲斐奈神社＠笛吹市)，磐城西白河郡の**双石明神社**(#21，現・白河市)，石清水八幡宮の摂社**志多羅社** (#22，石清水八幡宮に近接と伝も，現存せず)，壱岐の**月読神社** (#22，現・壱岐市)，対馬の**阿麻氐留神社** (#22，現・対馬市)，陸中磐井郡の**立石明神社** (#28，現・立石神社＠一関市)，常陸の**大洗磯前神社** (#28)，etc.；《⇒柳田が反証可能仮説の形で自らの説を提唱した訳ではないので反証例にはならないが，地域の境界からやや離れた場所に鎮座する神社がなぜ同書で10社余り言及されるのか？》

↳ 本発表では旧来研究の代案として，この書簡集における宛先による書簡の特徴に注目してみたい。

上記のうち石井正己2000著書のp. 159で，34通の発信・受信者および年月日が表化されている。そこでも見られるように，**山中笑**(共古)宛て書簡が一番多く10通(#1, #3, #5, #9, #13, #17, #20, #26, #28, #32)，次いで多いのが**白鳥庫吉**宛てで4通(#10, #14, #22, #29)，2通が**伊能嘉矩**宛て(#16, #21)および**佐々木繁**(喜善)宛て(#24, #30)。残りは1通のみで，**和田千吉**宛て(#6)，**喜田貞吉**宛て(#15)，**緒方小太郎**宛て(#33)，**松岡輝夫**(映丘)宛(#34)。このうち佐々木宛て2通は，遠野関連の話題が主。

↳ 柳田発の書簡22通のうち同一宛先で複数書簡のある下記3通(伊能宛て，白鳥宛て，山中宛て)を以下検討する。これら3通は，上に見た**所在が境界地帯ではない神社**が言及される書簡でもある。

なお，村井紀1992著書が注目した#33緒方小太郎宛書簡については，次の論考が読み直しを試みているので，ここでは再考を行わない;refer ⇒ 岩本通弥「「民族」の認識と日本民俗学の形成」(篠原徹〈編〉『近代日本の他者像と自画像』柏書房，2001)，pp.277ff.

(1) 柳田の伊能嘉矩宛て書簡のうち，#21

伊能嘉矩(1867-1925)は遠野生まれで，台湾原住民の調査や遠野周辺の郷土研究で知られる。『石神問答』では柳田発の#16，#21に対する返信は収録されていないが，遠野近くの地名に関する#16での記載に葉書で答えたことが末尾で付記され，また#16以前に#8で，短信(これも葉書か)ながら柳田の「シャクジン非石神論」についての賛同が記されている。

なお#16では，主にシャグジに関係すると思われる地名の考証で，遠野近くの象坪，讃岐の象頭山，また修験道で用いられる精進に関する地名が東国に見られ，西国ではそれが障子であること，後半ではシヤウジ，サウヅから，俗間の地獄を説くとされるサイノカハラ，道祖神のサヘが連想される。このように末尾で論旨がやや飛躍。

#21はまず，象頭なる地名(#1山中宛てでも言及)について，讃岐の金毘羅，阿波の象頭岩，『今昔物語』の僧都殿という魔所に触れ，象頭神と障神との間の相似性に触れる；⇒おそらく象頭の漢字表記より，浅草の聖天が象首人身の二神が抱擁する像であり，諸国の聖天や歓喜天にこの例が少なくない。

さらに連想が進み，道祖神にもこの形があること(小諸，『今昔』，『扶桑略記』)，道祖神で石か木で男性器を示す場合があること，これが男性形の塞の神であり，これを手向けとする信仰は後世のものか否か(後の「人柱と松浦佐用媛」1927でも，道祖は情欲神であり，仏者は象頭神を以てこれに擬した，という議論あり)。道祖神が閉塞を掌る神であること，石がその徳を表示することは，近代の例も多いが古くから類例があるのではないか(岩村の幸神，因幡岩美郡の道祖神，『塵添壒嚢抄』)。

(ここから論点が変化し)拝石の風の根源は，我が国で古い。歓喜天に似通った陰陽神としての道祖神の信仰については，古史を探せないが，石神には似たものが多い。伊勢二見の猿田彦石と猿田姫石，磐城西白河郡の双石(ふたついし)明神社，大隅肝属郡の石神神社，『三代実録』に出る石見国の石神など。男女で

はないが，二神を祀る例として多摩と三河の石神。それに関する篤胤による解釈を参照(磐の縁)；⇒陰陽二神の協力は，外蕃の迷信によらずに解釈ができる。韓国における金精類似の神像をも参照。

↑見られるように，前半は象頭より連想された聖天歓喜天の像から，男女一対の道祖神の形象に及ぶも，後半では道祖神から離れ，陰陽神としての石神の例へと論点が移る。したがって，先にも参照した磐城白河の双石明神社は，地域の境界を鎮護する神として挙示された訳ではない。

(2) 柳田の白鳥庫吉宛て書簡のうち，#22

白鳥庫吉(1865-1942)は東洋史学者，東京帝大教授。『石神問答』には柳田宛て書簡が収録されていないが，同書再版序によれば白鳥が柳田邸のある隣町に住んでおり，柳田が書簡を持って訪問して教えを請うた旨書かれている。計4通の白鳥宛ての書簡全てに注記があり，白鳥コメントを記録した可能性もある。

#10は，「シャマン道」の専門家に対して我が国の雑神について列記するので，御参照を乞う，という枠組で，道祖神から石神・サグジ，大将軍などが列記される。白鳥の答えかと思われる注では，姥石・サバ神・天白などが触れられるが，石神・サグジは無し。#14は，我が国賤民の一種である唱聞師が行った禁裏でのサギチヤウに関わる問い。秋田や松本でこれをサヘノ神祭と呼ぶこと，自分の郷里である播磨ではトンドと云うこと。郷里では年越しの夜に産土神の前で焼くのをサイトと称し，12本の葉竹を使用するが，外蕃でその例があるか。トウドは唐土に繋がるか。注では『木曽名所図会』と『塵添壒嚢抄』が参照されるので，白鳥の教示なのかどうか。#29は#14を若干踏まえていて，大歳に関する信仰について記紀や『旧事記』，『簠簋内伝』，神道五部書などにより纏めた長文。山神についても若干言及がある。注は宇賀神，牛頭天王，日吉七社で，これも白鳥の教示かは不明。

#22は，昨年から問うている幾多の雑神のうち，神代史に所見なく南都北嶺の渡唐僧が将来したものでは，との前振りから，渡来の疑いの強い神々を列挙する。①『本朝世紀』に載る志多羅神の石清水八幡宮への動座で知られる同宮の摂社で，『百錬抄』には鎮西より上洛し紫野に着いたともされる志多羅神(設楽神)，②『百錬抄』に見える福徳神，『古今著問集』には神体が狐と載る，③近江・播磨・壱岐などの兵主神，④客大明神，客人大権現。武蔵で荒脛(あらはばき)社と称する小社など，⑤韓国よりの渡来神，摂津姫島の神，伊予三島の神，秦氏の祖神と称する山城の稲荷神社 etc.，⑥任那の月神日神，それを継承する壱岐の月読神社，対馬の阿麻氐留神社，加えて日蓮宗の三十番神，牛頭天王八王子の信仰，民間の習俗行事への道教の影響，アジアと同様に日本も巫覡歌舞の国であること etc.が付記。注は『簠簋内伝』に載る熊野三所権現の来朝説話，日月神，三十番神の補足などで，白鳥によるかは不明。

↑見られるように，#14の一部でサヘノ神が触れられるが，白鳥宛ての柳田書簡の多くが，日本の「雑神」のうち外蕃由来と考えられるものに関する質問である。ここで問題とした#22では，先に触れた壱岐・対馬の2社(上の⑥)を含めて，ほぼ全てで地域の境界を守護する神格は問題とされていない。

(3) 柳田の山中笑(共古)宛て書簡のうち，#28

山中共古(1850-1928)は，メソジスト教会牧師にして草創記の民俗学者。#1，#3，#5，#9の冒頭まで，上記した和歌森1954著書における概要の延喜式云々までとほぼ同で，シャグジが石神とは別のものである考証。#13から十三塚と関連させて将軍地蔵の話，#17は長文で，道祖神，御霊社，大行事社，荒神，山神などを別々に考察すべきでないとする。さらに，シャグジは石神だとして構わないと前言を翻し，道祖神を帰化の神と見るのは自明，的な文言も(「この道祖神は既に御承知も可有之通　本邦固有の神に非ざるに　其帰化の最も古くして」云々，定本12，p.73)。#20は石神考に戻り，守公神の考察からシュク・賤民を参照。賤民の参照は#14白鳥宛てに似るか。#26は左義長と道祖神との関係，渡来の行事なのか，左義長と御霊会との関係，道教の参照などで，左義長が参照されるのは#14白鳥宛て，道教の参照は#22白鳥宛てと似るか。#32は精進・象頭に戻り，障神がサヘノカミと訓め云々と，和歌森概要の結論部分と近くなってゆく。

以上のように，山中宛書簡群はシャグジを境の神と見る傾向が最も強いと考えられるが，#28はやや異質である。まず，#27で山中が納地神（おさめじがみ）（山中によれば，一村坪割りの基として祀られた神社）とシャクジとの関連を述べたことに対して，それを付会とする。荒神，山神，道祖神が深山曠野に位置するのに対し，シャグジを稲荷社と同じく里近くにある社とする（定本12，p. 115；←今までと異なるのでは?）。道祖神と関係づけて山中に多い姥神に由来する地名の話から，オボ神，女巫に説き及び，次に話題を人工の石塚に転ずる。さらに，十三塚で中央の石が大きな場合に触れ，陸中磐井郡の立石明神社の立石，大洗磯前神社の伝説（明記されないが『文徳実録』；←「玉依姫考」1917でも言及）における水辺に天降った神石などを参照する。その後，塞神塔と石地蔵との近似性，「山中の石神」云々へと転じ，さらに塚を築くことと森とに共通するものがある，という話に移行する。これは後の「塚と森の話」（1912）を予告するかのようである。

↑以上のように山中宛て書簡は，山中からの返信が柳田からすると予想外なものを含んでいた為か，柳田の反応にかなり揺れが見られる。地域の境界に強い関心があった#1をはじめ，およそ#9冒頭まではシャグジと石神は別のものを指す筈(少なくとも，石神の呉音ではない)だったのが，#17でシャグジは石神のこととされる。さらに#28では，シャグジを里近くの神と明記し，山深い曠野に位置する道祖神と異なるものとするようになった。ここで言及された大洗磯前神社など２社も，境界地を鎮護する神社ではない。

３ 小括

○ 渡来系の神への関心が強く見られる；白鳥宛て書簡以外にも，山中宛て#17での道祖神を古い帰化の神と見る文言(refer⇒上記引用)，同じく#26での左義長と道祖神祭の起源が漢土か三韓か，との推測も(「左義長と道祖神祭との関係のこと現在の典籍にては果たしてどの位迄明瞭になり申すべきか　甚だ心細き次第に候　上元の行事は何れも漢土又は三韓よりの渡来とおぼしく候…」，定本12，p.103)。

○ 柳田としては，シャグジを塞の神，岐の神へと導こうとする志向が確かにあったが（最初と最後の書簡で先に引用した箇所のように），参照した事例には上記神社のようにそれとは異なるものが少なからず有る；山中宛て#28のように，シャグジを里近くにある社であり，道祖神とは別とする言説もある。

○ 少なくとも本発表でとりあげた3通の書簡に関しては，山人との関係が濃厚とは云えない；山中宛て#28で議論される山中の姥神・オボ神は，おそらく里人側からの神格ではないか。

↳ 隘勇線に相当する山間部との境界を鎮守する（石の）神の考察，柳田山人論への一里程，と位置づけてしまうのは，『石神問答』の有する可能性を矮小化する解釈であろう。

白鳥宛て書簡で複数回使われる語である「雑神」に相当するものは，同書全体では道祖神，姥神，若宮，荒神，猿田彦神，ミサキ，御霊神など後に柳田が考察するものが含まれており，また上記のように渡来系の神への関心も強い。このことから，『石神問答』を柳田のそうした「雑神」についての研究事始めと見るべきではないか。